平成２１年度自治体国際協力促進事業（モデル事業）

# 日本庭園（サギノ一徳島友好庭園）の維持管理向上のための造園技術協力事業

徳島市（徳島県）

## １．はじめに

昭和 36(1961)年、徳島市とサギノー市（米国ミシガン州）は、姉妹都市提携を行った。

昭和 45(1970)年、サギノー市において、日本庭園（サギノー徳島友好庭園）の建設が計画され、同年３月には、庭園建設のため、徳島市からサギノー市に雪見灯籠、春日灯籠、青石、あずまやなどを贈り、同年７月から 10 月までの間には、徳島市の造園師がサギノー市を訪問し、日本庭園の建設指導にあたった。その結果、昭和 46(1971)年６月にサギノー徳島友好庭園が開園に至った。

そして、その後、昭和 53(1978)年８月には、サギノー市から徳島市へ友好庭園の土地の２分の１(1,630 ㎡)が寄贈され、この両市の土地の活用を検討した結果、サギノー市民に日本古来の伝統文化である茶道を通じて、日本文化を理解してもらうため、両市民が主体となって寄付を募り、数奇屋造茶室「阿波鷺能庵（あわさぎのうあん）」が建設（昭和 61(1986)年５月開設）されるに至った。

以上のように、サギノー市の中心部に位置するこのサギノー徳島友好庭園は両市の共同所有であり、またその上に建設された茶室「阿波鷺能庵」においても両市民の理解と努力のもと建設されたものである。

## ２．事業実施に係る経緯

サギノー徳島友好庭園は、茶室「阿波鷺能庵」とともに、今日サギノー市民だけでなく、近隣の都市及びミシガン州の人々によって、真の日本文化が体験できる場所として重要視されており、またこの庭園は訪れる人々に癒しと安らぎを与える場所としても注目されている。

サギノー徳島友好庭園は、自然庭園部分と日本庭園部分とから構成されており、自然庭園部分は、自然湖、大きな木々そして一面に敷かれた美しい芝生からなっている。

そして、その自然庭園部分を分け入って進むと、日本庭園部分であるロックエリア（石組）、滝口から自然湖へ流れ出る小川、そして茶室「阿波鷺能庵」とともに日本庭園の中核となる茶庭へとつながっている。

この友好庭園は建設されて３９年という歴史があり、この長期間における手入れはサギノー市、サギノー市民によって行われ、その手入れは大変行き届いたものであり、とてもきれいに整備されてきた。

しかし、日本庭園部分については、日本の造園の知識と技術をあまり持たないまま、米国の造園の知識と技術に基づき、日本庭園の維持管理が行われてきたため、当初この日本庭園が備えていた日本らしさ、日本の美が薄れつつあるという現状であった。

米国の造園技術は大変素晴らしいものであり、日本でもその技術が多く取り入れられているが、日本庭園の維持管理には、日本の造園技術とその造園における根本的な考えや知識が欠かせない。

そして、この友好庭園は、茶室とともに『真の日本文化を発信する拠点』としての役割を担うことが大いに期待されており、今後もサギノー市において、この友好庭園が「日本庭園としての本来の美」を平素から維持できるよう努めていかなければならない。

よって、徳島市から熟練した造園師を派遣し、日本の造園技術と日本庭園の美の構築の概念についての基礎的な研修指導を行い、常時「日本庭園として日本の美」を現地スタッフが表現できるよう、平成２０年度に引き続き日本庭園の維持管理における造園技術の向上に努めた。

## ３．事業概要

⑴　日　程

派 遣 期 間：平成２１年９月 21 日～9 月 28 日（6 泊 8 日間）

研修実施日：平成 21 年 9 月 23 日～9 月 26 日（4 日間）

| 月　日 | 日　　程 |
|---|---|
| 9 月 21 日 | 徳島市から関西国際空港・デトロイト経由でサギノー市へ。 |
| 9 月 22 日 | サギノー徳島友好庭園の下見と打合せ・資材の調達 |
| 9 月 23 日 | 午前：講義　－日本の庭を考える（石組み）－<br>午後：四つ目垣の作法 と 紐の結び方（模型作製） |
| 9 月 24 日 | 終日：石組補修 |
| 9 月 25 日 | 終日：石組補修 |
| 9 月 26 日 | 終日：四つ目垣の作法，鉄砲垣の作法 |
| 9 月 27 日<br>9 月 28 日 | サギノーからデトロイトへ。<br>デトロイトから関西国際空港経由で徳島市へ。 |

⑵　派遣した者及び参加者

派遣した者：徳島市在住の造園師　２人

参　加　者：NPO 法人 Japanese Cultural Center & Tea House メンバー及び管理人
造園師（サギノー市等）、マスターガーデナー、ボランティア

## ４．事業内容（研修・指導内容）

１日目（９月２３日）

－講　義　日本の庭を考える－

今回の造園技術の指導は、石組を中心に行ったため、石組の美とは何か、日本の美と西洋の美の違いについての講義を行った。

そして、「日本人の美意識」について理解を深めてもらい、石組を造り上げていく過程で必要となる「空間のバランス」に対する日本文化の理解に努めた。

この講義は、石組補修を実施するにあたって、大変意味あるものとなった。日本文化における美意識について、サギノー市の方々に理解してもらえる良い機会となった。

－　四つ目垣の作法 と 紐の結び方－

１日目午後からは、昨年からの課題であった「四つ目垣の紐の結び方」を重点的に行った。今回の研修では、３日目の四つ目垣の作製にとりかかる前に、研修として模型を作り、四つ目垣の作法を学んでもらい、その模型で紐の結び方を徹底的に練習した。

今年度は、徳島市の造園師がサギノー市に訪問する前に、「紐の結び方」を説明したＤＶＤを郵送し、サギノーの人たちはそれを見て事前学習と練習に励んだ。その成果もあり、昨年に比べてしっかりと紐を結ぶことができるようになった。

２日目・３日目（９月２４日・２５日）

－石組補修－

２日目の研修は、石組補修を行った。茶庭と同様にサギノー徳島友好庭園の日本庭園としての見せ場である。しかし、過去にサギノー市（米国人）では日本庭園における石組について、根本的な理解がなされていなかったため、その石組の石を移動してしまい、雑然とした状態で石が置かれる状態となった。

日本庭園において、石組は日本の美的感性を最も表現しているものであり、何よりもその作庭者の庭園（造園）に対する思いが込められるものである。

こうした日本庭園を管理していく上で必要となる石組に対する日本人の概念について、友好庭園の管理人及びサギノー市の造園師は、徳島市の造園師とともに作業し、それがどのように造り上げられていくのかを実体験することで、石組に込められた日本の美を理解することができた。よって今後、この日本庭園を管理していく上で、二度と石がむやみに動かされることはない。補修は次のように行われた。

①修復前の写真で、向って右側にある石組は、作庭された当初のまま動かされた形跡がないため､そのままの配列を保った｡向って左側にある石は雑然と置かれた状態となっていたので、クレーン車を使いすべての石を一度石組からはずし、その後余分な土を取り除いた。

②徳島市の造園師は友好庭園を下見した際に、新たに大きな石を 2 個購入しており、そのうちの一つをこの石組の中核となるように据えた。そして、その石を中心として、以前からあった石をそれぞれの石のバランスや顔を見ながら、一つずつ丁寧に穴を掘っては正面を決め、石を据え、少しずつ微調整を行いながらその周りに土を入れ、石の高さ、傾きを決めていった。

③すべての石が組めた後、この周りに砂利をいれるため、砂利止めをつくった。この砂利止めを組んでいく作業はただ石を並べていくだけなので、簡単そうに見えるが、天然石を使用するため、それぞれの石の特徴とバランスを考え並べていかなければならなかった。

４日目（９月２６日）
－四つ目垣の修復－

今年度修復した四つ目垣は、立礼の庭から茶庭の庭へ入るところに位置し、昨年の修復した四つ目垣と比べると少し長さが短い。今回の修復指導は、この古い四つ目垣をすべて取り除き、ここに新たに四つ目垣と枝折戸を設置するというものであった。

今年度の課題は、四つ目垣の作製において欠かせない「紐の結び方」を完全にマスターし、この四つ目垣の修復が必要となったときには、サギノー市のスタッフだけで修復がすべてできるようにすることであった。

この紐がきちんと結べていなかったり、きっちり締まっていなかったりすると、雨水で紐がふやけ緩み、四つ目垣が傾く原因となる。そのため、この修復技術は四つ目垣の修復には欠かせないものである。

この造園技術は、日本の造園師でも初歩のころは簡単に結べるものではなく、何度も何度も練習し、やっとしっかり結べるようになるものなので、この技術は容易に習得できるものではない。しかし、今回、DVD による事前練習と研修 1 日目の練習の成果があり、サギノー市のスタッフの中に四つ目垣の紐をしっかりと結べる者が数人でてきた。

## ５．事業の成果と今後の課題

平成 20 年度と平成 21 年度の 2 年間にわたり、徳島市の造園師をサギノー市へ派遣し、実地指導を行いながら、日本庭園が本来の美観を平素から保てるように、日本の造園技術や日本庭園の美の構築についての研修指導を行い、現地スタッフによる日本庭園の維持、管理が適切なものとなるよう技術の向上に努めた。

日本の造園技術のすべてを短期間で伝受することは不可能であるが、サギノー徳島友好庭園にある景物について必要な技術だけを、重点的に習得してもらえば茶庭の維持管理は行っていくことができる。そして、日本庭園が果たすべき文化的意味や機能について、理解してもらった上での維持管理を行えば、その手入れについても今まで以上にサギノー市のスタッフによる熱意ある庭園維持管理を行っていける。

今回の事業実施において、徳島市の造園師とサギノー市のスタッフがと共に日本庭園の修復を行ったことで､サギノー市のスタッフの友好庭園に対する維持管理への熱意がさらに増した。石組補修においては、サギノー市のスタッフはその技術の素晴らしさとまたその石組の美しさに感銘を受けたとともに､この日本庭園の見せ場が再生したため､この日本庭園を鑑賞する人々にも改め、真の日本文化を発信することができるようになった。

また、研修最終日には、サギノー市のスタッフからの積極的な申し出があり、もう一つある石組にも砂利止めがなく、砂利が敷かれていない状態であったため､「自分たちだけで砂利止めを造り補修したい」という話が持ち上がった。そして、再度、砂利止めの組み方について、徳島市の造園師に積極的に質問する場面があった。そして、徳島市の造園師が帰国した後も、この石組の周りをサギノー市のスタッフだけで砂利止め造り上げ、きれいに砂利を敷くこととなった。

このように、サギノー市には素晴らしい日本庭園はあったが、その日本庭園として維持管理を行っていく技術がなかったため、日本庭園の美が失われていく結果となった。しかし、平成２０年度、平成２１年度とその技術が導入され､『日本文化の発信の拠点地であり、友好のシンボルである』この友好庭園の存在価値を改めてサギノー市のスタッフが再認識したため、今後この古き歴史ある施設を大切に守って行くことができるようになった。

また、今後の課題として、サギノー市でこの庭園の維持管理が続いていくよう、サギノー市と徳島市、サギノー市の造園師やマスターガーデナーと徳島市の造園師といった姉妹都市間での交流をさらに蜜に、両市の友好のシンボルである「サギノー徳島友好庭園」及び茶室「阿波鷺能庵」を大切に守っていかなければならない。